

高橋揆一郎

えんぴつの花

えんぴつの花

高橋揆一郎

えんぴつはなの花

一九八九年八月三十日 第一刷

著者紹介

一九二八年、北海道歌志内に生まれる。札幌師範学校中退。代用教員、会社員、イラストレーターなどを経て、作家生活に入る。七三年、『ぼぶらと軍神』により第三七回文学界新人賞を受賞する。七八年、『伸子』により第七九回芥川賞を受ける。市井の人々の人情の機微にふれるユーモアとペーソスをたたえた軽妙な筆致の作風には定評がある。

(定価はカバーに
表示してあります)

著者 高橋 揆一郎

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号 一〇二

東京都千代田区紀尾井町三一二三

電話代表(〇三)二六五一一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁のある場合は

お取替致します

目次

えんぴつの花 — 『綴方教室』 豊田正子

未完の馬 — 夭折の画家、神田日勝 135

あとがき 228

装丁

田村義也

中国・藍印花布より

えんぴつ
の花

えんぴつ
の花

— 『綴方教室』
豊田正子

半年ぶりの再会の場合は東京新宿の厚生年金会館ロビーだった。三月のおだやかな宵のまちを車で走って、私とカメラマンのZさんが先着した。

画家のAさんが続いて現れ、三人でややあやあと握手を交して最後のひとり豊田さんを待っていると、豊田さんは外からではなく館内の廊下伝いにやってきた。はじめて見る和服姿である。

中国製の藍印花布（ういんかふ）の上下か、ごく地味なブラウスにスラックスという旅姿をずっと見なれてきたので、客の間を縫うようにして近づいてくる和服の豊田さんは別人の趣きがあった。

豊田さんは観劇のために本式に装ってきたのである。私は自分のジャンパー姿を恥じた。観劇といってもその夜は芝居ではなくバレエ団の公演だったが、私たちは豊田さんに招待されていた。みなのことだけならまだしも、まずいことに私は仕事のため、Zさんは他のつきあいのために、二人は途中で席を立つことになっていた。

そのことはあらかじめ豊田さんに伝えてはいたものの、豊田さんのしっかりした装いを見て、

にわかにそれが非礼なことと思われてきた。

ひとまず館内の喫茶室におちつき、再会の挨拶を交したあとで私はもう一度のそのことを詫言した。

「わかってますよう。気にしないでください」と豊田さんはいった。

私たちは前年の秋、中国のシルクロードを中心に一か月にわたって旅した仲だった。

私の住む札幌市に本社をもつ北海道新聞社が、中国作家協会会員を北海道に招いたことへの、中国側からの答礼の招待旅行だった。

メンバーはもうひとり、秘書長役に文化部記者のIさんが加わった五人で、私が地元の関係で団長をつとめた。中国のことはほとんど知らない頼りない団長だったけれど、中国通の豊田さんのおかげでずいぶん助かったのだった。

以来半年たって、舞台の催しものならなんでも好きだという豊田さんが、再会を機にMバレエ団の公演に招待してくれ、社用で欠席したIさんをのぞく四人が顔を合わせたのである。

挨拶をすませたあと、豊田さんは私との約束だからといって、柄もののハンケチの包みを差し出した。中身は赤飯である。

豊田さんは私に、帰国したら手づくりの赤飯を食べさせてあげると約束していたのだった。豊田さんはひとり暮らしだから、食べ物は何でも上手にこしらえるけれど、とくべつ赤飯をつくるのが好きなのだという。

バックづめの、そのへんの出来合いのとはひと味ちがう、小豆^{あずき}からしこしこと煮て、昔ながらの蒸籠^{せいろう}で蒸した本格派だと豊田さんは真顔^{まがおもて}で力説していた。

その夜は他に重箱入りの赤飯も用意していて、これは楽屋への差し入れ分で、私の分はハンケチごと持って帰って奥さんとふたりで食べてくださいと豊田さんはいった。めずらしいものではないことなど互いに百も承知の、ままごとのようなやりとりだったが、豊田さんは、団長との約束は約束だという顔だった。

私はAさんとZさんに片眼をつぶり、これは既得権だからといってジャンパーのポケットにねじ込んだのだった。

開演のブザーで私たちは中に入り、四つ並んだ指定席に着いた。舞台はチャイコフスキーの『白鳥の湖』だった。華麗である。

プリマ・ドンナのM女は軟体動物のようだった。人間の体があれほどにも軟かになるものだろうかと私は感心して見ていたが、世界的に有名だという相手役の白人ダンサーは大柄すぎ、舞台をみしみし鳴らすので私はあまり好ましいとは思えなかった。

私は中国で見たいくつかの舞台を思い出していた。北京で見た京劇は、伝統衣裳がきらびやかな上、音楽はこれぞ中国という陽気さだったし、トンボ返りがふんだんに出たりで楽しかった。役者たちは両眼をかつと見開いたまま、まるで義眼をはめているようなので、ふしぎに思っただけで、京劇の役者はまばたきをしない訓練を積んでいるとのことだった。

トンボ返りといえば、私は北京のホテルに近い路上で子供たちの訓練を見た。通勤の自転車の波が切れ目なく続く朝早い時刻、大きな建物の塀沿いに人だかりがしていた。のぞいてみると数人の少年少女が、走り幅とびの要領でつぎつぎと走っていったのはマットがわりに敷いた南京袋の上にトンボ返りをする。そこに調教師ふうの黒服の男が待っていて、宙返りの瞬間に手を貸すの

である。訓練もおもしろかったけれど、朝っぱらからそれを取り巻いて動かない見物人たちの悠長さが、私にはもっとおもしろかった。

幕間がきて、私は主役のバレリーナはなんとすばらしいのだろうと歎息してから、豊田さんと京劇の話をした。

「途中から道化が出てきたでしょ。目のまわりをめがねのように白く塗って」

「そうそう。その道化がまた思いつきりばちりばちまばたきするもんだからよけい目立つのよ。笑ったわねえ」

「楽隊のあくび、気がつきませんでした？」

「あくび、気がつかなかった」

舞台の袖に、胡弓や笛や銅鑼や鉦を鳴らす数人の楽士が陣取っていた。私がなにげなく目をやったとき、鉦を持った男が客にかくそうともせず大きなあくびをしたのだった。

「日本のカブキの清元や長唄連中の、しゃっちょこぼって一糸乱れぬあれとは大ちがい。あれでばくはすっかり中国人が好きになりました」

「そうなのよ。おおらかなのよう」

豊田さんは絞り出すように声に力をこめた。

「こうしてみんなでいると、なんだか中国の劇場にいるような気分です」

北京はもちろん、トルファンの野外ステージ、玉門の現代劇、南京のオペラ『椿姫』、上海での越劇。いつも五人いっしょだった。

「トルファンであなた、舞台にあがってゴリラのまねやったでしょ」

「いまでもふしぎです。見ず知らずの異国でどうしてあんなクレイジダンスをやったのか。マオタイ酒とトルファンの夜の妖しさのせいです、たぶん」

「まわりの中国人があたしにさ、あれはおまえの仲間かって訊くのよ。恥ずかしかった」

男たちはみな中国がはじめてだったから、客として品位を欠くことがないよう、豊田さんはいぶん気を遣ったのである。北京の京劇は旅のはじまりだったからみな元氣だったけれど、帰国直前の上海で「越劇」に案内されたときは、芝居がかいもくわからないのと旅の疲れで、男たちはつぎつぎと眠りに落ち、ひとり豊田さんだけが目をあいていた。案内の人が非常に恐縮して私たちを途中で連れ出してくれたのだが、ホテルへ帰るみちみち豊田さんがみなにかわって詫びを入れてくれたのである。

館内に予鈴が響いた。

「またお会いしましょう。今夜はせっかくのご招待、ごめんなさい」

「いいのよ、お仕事なんだから」

「このつぎは、ごはんにお湯をかけてサラサラと食べましょう。あのサラサラが耳に鳴るんですよ。せせらぎを聞くように」

まわりを気遣って、豊田さんは声には出さず二度三度うなずいた。

「では赤飯いただいでいきます」

画家のAさんにも短くあいさつをし、暗くなる場内に追われるように私とZさんは席を立った。

昭和五十七年夏、北海道新聞社から渡された訪中メンバー表を手にして、私は何ともはるかな

気分を味わったものだ。四人の男にまじってひとりだけ豊田正子という女性名がある。

あの『綴方教室』の豊田正子だろうかと半信半疑だった。肩書のA A研（アジア・アフリカ作家日本委員会）がなにやらこわもてでもあった。私は『綴方教室』を読んでいなかったので、図書館から借り出して出発前に読んでおこうと心がけながらついに果せなかった。

にもかかわらず豊田正子の名をメンバー表で見てから、私にはおさえようもなく小学生時代への郷愁が湧いた。

青い空や白い雲からはじまって、ほこりっぱい通学路の地面や、道ばたの雑草。夏の日の野外写生のクレヨンの匂い、消しゴムくさい教室の臭いなどが、入れかわりたちかわり五官をくすぐるようだった。

昭和十四年。私は尋常高等小学校の、五年一組の教室にいた。北海道の炭鉱まちの、児童生徒数千五百人を越す大きな学校だった。

五年一組の受持ちは、あたりかまわぬ放屁とおはなしのおもしろさで子供たちに人気があったK先生だった。そのとき私は級長をやっていて、市街地側の明るい教室で、K先生の口から『綴方教室』という本の題名や、トヨタマサコという人の名を聞いたのである。二学期からは山側の薄暗い教室に移り、受持ちも級長も替わったのだから、この記憶はまぎれようがない。

東京にトヨタマサコという綴方の天才少女が現れて、映画にもなり芝居にもなって、たいそう評判であるということをK先生は度の強いめがねを光らせながらいった。

実際には『綴方教室』はその二年前の昭和十二年の初版だが、私は五年生になってはじめて知った。

K先生の宣伝にもかかわらず、私には遠い、おとなのことばでいうなら『花の都』のできごとにすぎなかった。本も与えられなければ映画を見せてもらえなかった。

もし私たちのまちの映画劇場でも上映されたのなら、当然学校行事になっただろうに、そういうことはなくて、私は教師に引率されて見にいったエノケンの『鞍馬天狗』や冒険王ハヤブサヒデトに夢中になっていた。

私は『綴方教室』の意味がよくわからなかった。というより変な名前の教室があるものだと思っていた。そのころ授業としての綴方は教師も軽侮していたようで、それが子供心にも伝わった。とりわけ私は綴方が嫌いだった。原因は戦地の兵隊さんへの慰問文にあった。私は二、三の友だちといっしょによく放課後に残されて書いた。日中戦争も二年めを迎えて、私は、「暴戾支那^{ボレイシナ}ヲ膺懲ス^{モウテイシユ}」というようなことばも覚え、戦地の兵隊さんの悪戦苦闘に感奮する点で他と少しも変わりがなかった。

しかし慰問文だけはいただけなかった。心をこめて書くようにといわれても、どうやって心をこめるのかわからなかったし、何とか書きあげるとあれこれうるさくいわれる。つまるところ皇国、皇軍、大勝利、銃後の守り、一億一心、向かうところ敵なしの百発百中といった鑄型ことばの並べかえだが、それがないとK先生がいい顔をしなかった。少しもおもしろくないから人よりうまく書いてやろうという気が起こらず、ひたすら先に下校した友だちの、喚声をあげて遊ぶあわせな光景を思い描いて、綴方への嫌悪感を募らせた。

天才少女の書く綴方はどんなものだろうなどと想像すらしなかったはずだ。

あれから正確には四十三年たって、錆ついた重い扉がぎしぎしと開き、五年一組の一学期の明

るい教室や、めがねをはずすと人相が変わって見えるK先生や、机を並べた学友たちの姿が手にとるようによみがえったのである。

私は高等教育に無縁だったから、小学校時分の日々はどれも多少の差らいや悔恨を伴ってよく思い出されるのだが、読んだことも会ったこともない『綴方教室』の作者の名に連れ出されるように、頭でっかちの、ぼんのくぼまで見えるほどの、十一歳の自分の分身がすうっと身を寄せてきたのには、少なからずおどろきもしたのである。

中国へ出発の二日前、私は豊田さんに会うのを楽しみに上京した。一行は北海道新聞東京支社の応接室で顔合わせをした。

初対面の豊田さんは小柄なまるまっちいひとだった。ふんわりとセットした髪や、濃紺の夏セーターが、めがねの光る豊頬で色白の顔を際立たせていた。

しかしめいめいの紹介にはじまって、最後に支度金やパスポートを手にして別れるまで、豊田さんはこりともしなかった。それどころか機嫌がわるそうで、私にはなんだか豊田さんがこのたびの訪中をいやがっているふうに見えた。

場所を近くのレストランに移した簡単な壮行会の席で、豊田さんが支社の幹部に訴えるところによると、豊田さんは折から国の内外でかまびすしい日本の教科書改訂問題にこだわっているようだった。

「わたくしとしてはこんなときにゆくのが、とてもためらわれるのです」

支社の幹部は長く北京特派員をやったひとで、豊田さんの憂慮はわかるけれど、国交の大本は不動なのだから神経質にならなくてもいいのではないかと力説した。

豊田さんの憂色が少し晴れたのは、豊田さんが属するA A研の責任者というS氏の言を、自身で引用したときだった。

「でも、あんたが日本を背負ってゆくわけじゃないだろうといわれましたし」

相手をした幹部氏がおうむ返しに、それはまったくその通りだと相槌を打った。そんなことは豊田さんもわかっていて、ただ唯々諾々と訪中に応じたのではないという心境を吐露したかったようである。

実は私も、団長を仰せつかっていろいろ、その問題で矢面に立つのだろうか多少気後れしていたところだったので、S氏の言は私にも効いた。

「豊田さんは向こうに知り合いが多いでしょうから、むしろ友好の懸け橋になっていたかどうかの気概でおいでくださいな」

幹部氏がそうしめくり、豊田さんもあととはおとなしく食事を進めていた。一連のやりとりで豊田さんが中国と深いかわりがあることは想像できたが、どこか一徹な印象のため、それまでの私の郷愁などひどく甘つちょういものに思われたのだった。

出発の日のあわただしい成田空港で、私は冗談をいった。

「これじゃあ、四人組と林彪のとりあわせだ」

他の四人がいずれも東京在で、私だけが北海道から参加する。冗談だけれど実感だった。

男たちは他愛なく笑ったが、豊田さんは笑わなかった。私は豊田さんが固い殻の中から、とりあえず仲間となった男たちの吟味をはじめたような気がした。

しかし男たちはあっけらかんとしていた。